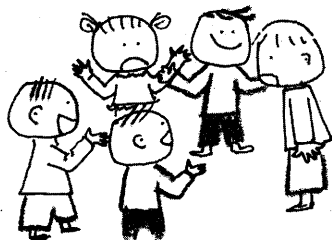


保育の現場から

「みんなの中の私」

ということ

伊集院理子



五歳児の子どもたちが、新しい世界に飛び立って行く時期が近づいてきました。卒業の前にこれまでの生活がいろいろと思い返されるこのごろです。幼稚園の生活の中で子どもたちそれぞれが自分のやりたいことを見つげ、それとことんやる生活が本当に積み重ねられてきたのでしょうか。さまざまな体験を重ねながら、昨日から今日、今日から明日と、子どもたちの意欲がどんどん引き出されるような生活を展開できていたでしょうか。

今担任している子どもたちとは、五歳児になってから生活を共にすることになりました。前年度も五歳児を受けもっておりましたから、二年連続の五歳児担任ということ、それは、だいぶ長くなってきた幼稚園教師としての経験の中でも初めてのことでした。私ももの園では、二年ないし三年、継続して子どもたちを担当することを基本としてきました。

四月当初、お帰り前などの集まりの場面での落ち着

かない雰囲気がとても気になりました。担任も変わって、それは当然の姿なのですが、こちらが話せばずっと聞こうとしてくれていた少し前まで担任していた子どもたちとの違い、自分と子どもたちとの関係の違いをどうしても感じてしまい、集まりの場面で子どもたちに自分の言葉を聞かせることに私は躍起になっていました。躍起になればなるほど、言葉は子どもたちの頭上をむなしく通り過ぎていくようにとらえられました。一人ひとりの子どもたちの様子より、集まりの場では聞くことに集中してほしい、五歳児であれば自分本位に行動するばかりではなく、周りの状況を受け止め、どう行動すべきか自分で考えて行動を調整できるようにであってほしいという、保育者の一方的な思いからしか、子どもたちを見られなくなっていたのだと思います。

鯨岡峻氏は、保育の場においては、子どもたちが自分なりの思いをもち、それを実現しようとする「私は

私」という感覚と、周囲の友達と共にいることや周囲の友達と一緒に何かをすることに向かう「私はみんなの中の私」「私は私たちの一人」という感覚の二つの感覚を子どもたちの中に育てているのだ、ということを書いていきます。

「みんな」は、「一人ひとりが集まったのみんな」であり、「みんな」の中の一人ひとりに向けて、私はメッセージを届けていたのか、その前に、子どもたちの一人ひとりのメッセージを聞こうとしていたのか……自分のあり方が問われました。

日常の保育場面の中で、子どもたちが「自分」のやりたい遊びを選んで、それを実現しようとしているときに、一人ひとりの思いに応えていくこと、一人ひとりの「思い」が友達の「思い」ともつながり、その「思い」が共に実現されていくように支えていくこと、そのことから始めなければ、「集まりの場面では、先生の話をお聞きしよう」とお題目を唱えてみても、それ

は子どもたちの心の中に届いていかないのです。まず、保育者が子どもたち一人ひとりとていねいにやりとりを重ねていくこと、それは、何ら三歳児担任のとき、四歳児担任のときと変わらない保育者として一番大事な姿勢なのだということを久々に深く感じました。

子どもたちそれぞれが「自分」というものを確立して、「自分自身の思い」を出して、その「思い」を遂げていくようになるには、保育者との信頼に値する関係の積み重ねを抜きにしてはあり得ないこと、子どもたち一人ひとりにとって、保育者が信頼に値する人間として位置付くためには、ある程度の期間が必要だということ、五歳児からの子どもたちとの出会いが、私を原点に立ち戻らせてくれたように感じました。

さて、「みんなの中の私」「私は私たちの一人」ということをお題目ではなく自分の感覚として子どもたちがもてるようになっていくには、保育者との関係だけ

が問題になるのではなく、子どもたち同士の関係が何といっても大事になってきます。

五歳児の生活の中で、気心の知れた仲良しとの関係だけではなく、いろいろな友達とかかわる機会をもち、違った考えをもった友達と意見を交し合ったり、相談したりすることはとても大事な機会になります。

子どもたちが自分で選ぶ遊びを中心とした生活においては、どうしても子どもたちの人間関係は限られてきます。そこで、五歳児の後半の生活においては、これまでの子どもたちの人間関係、一人ひとりの子どもの性格・特性などを熟考し、クラスを超えて学年を四つのチームに分けて、遠足、運動会などの行事のときや、園での生活において学年で役割を担っていくときにチームを基盤にして行動をしていきました。

二学期に入って、生活が軌道に乗り出したころ、学年で集まり、チームのメンバーを発表しました。十月初めの運動会に向けて、チームカラーやチームの名前

を相談する機会を何度かもち、メンバー全員が合意の下に決めていくことを目指しました。

チーム名を決めるときのこと、四つの部屋に分かれてチームで弁当を食べた後、メンバーで相談して名前を決める予定でした。チームの色を決めたときの経験もあり、みんなで決めるということがどういふことなのか、子どもたちも少しずつわかってきています。あるチームでは、六つの名前に絞られました。その六つから一つに決めるのに、「くじ引きで決めよう」という意見も子どもたちの中から出てきていました。しかし、「くじ」「多数決」で決めてしまうのではなく、話し合つて一つの名前に決めてほしいと私は思い、相談を続けることにしました。

話し合いを重ねる中で、違う意見の友達を説得するために、どうしてその名前がいいと思うか、その理由も友達に伝えていきました。「ペガサスは馬みたいなんだけど、羽根があつて、空も飛べて、とっても速い

んだ」「速そうな名前の方がいいよ」「僕たち、白チームだし、ペガサスは白いんだよ」など、説得力のある意見も出てきて、大方の子どもたちは「ペガサスがいい」という流れになりました。その中で、A夫は「電車」、B夫は「カマキリ」の意見をなかなか変えようとしません。それぞれに自分が大好きな物を名前の候補として考えてきていたのです。運動会に向けてチームの旗を作る予定があることも子どもたちはわかっていて、「旗に、電車の絵を描いてもいいから、チームの名前はペガサスにしようよ」という説得で、A夫はやつと同意しました。B夫はその説得でも、「カマキリ」という自分が考えてきた名前を頑として主張し続けました。チームでの話し合いは時間切れとなり、もう少し時間を取つて考えてみることになりました。クラスに戻つてきても、同じチームのメンバーで、B夫と関係が深いC夫は、B夫を説得し続けました。C 「Bくんが、ペガサスでいいよ、つて言つてくれ

ないと、チームの名前が決められないんだよ。

Bくんは、カマキリがいいんでしょ。カマを持つている方がいいの？ カマがないとだめなの？

Dくんは、ペガサスがいいんでしょ？ (同じ

チームのメンバーの一人に意見を求める)

D 「ペガサスの方が、大きいし速いよ。足があるのに飛べるんだ」

C 「バッタはどう？ (カマキリと) バッタとどっ

ちが好き？ 昆虫が好きなの？ 自分も最初は

クワガタがよかつたんだけど、みんながペガサスがいいって言うから、変えたんだ」

傍らにいた私は、C夫の説得に聞き入りました。大人が安易に言葉を挟むことを拒むほどの真剣さがそこにはありました。カマキリがいいというB夫の気持ちをしっかり受け止めながら、自分の例を引き合いに出したり、同じチームのメンバーに意見を言ってもらったり、カマキリにこだわるB夫の気持ちを動かすため

に、「バッタ」という別の昆虫の名前をあえて出してきたり、いろいろ考えて、B夫が気持ちを变える気になるよう、落ち着いた口調で何度も繰り返し語りかけていました。

C夫の説得後、私も少しだけ説得を試みたにもかかわらず、その日はB夫が気持ちを变えることはありませんでした。降園時に保護者にもことのあらましをお伝えして、「家でも一緒によく考えてあげてください」とお話ししておきました。

次の日、学年全員でお弁当を食べることにして遊戯室に集まりました。お弁当の前に、各チームの名前を全体に報告していきました。最後にB夫のチームの番となり、B夫にマイクを渡すと、何と「ペガサスチームです」と大きな声で報告したのです。すると、同じチームのE夫が「マイクを貸して」と言ってきました。E夫は、最初からペガサスがいいという意見を言いつづけてきた一人でした。E夫は、特定の友達にしか

なかなか心を開こうとしないところがある子どもでした。そのE夫が、どうしても言いたいと言って「Bくん、ありがとう」と、B夫に向かって、そしてみんなに向かって伝えたのです。

B夫の保護者の話では、名前を決める前日から一生懸命考えて「カマキリ」という名前に決めていたこと、ペガサスのことを自宅でも調べて促したものの、なかなか意見を変えようとしないので理由を聞いてみると、ペガサスは架空のものなので、実存するものがないということだったようです。帰宅した小学生の姉が、みんなで決めるには自分の意見を変えなくていけないことも出てくるということ、自分の経験から話してくれたことが、気持ちを変える引き金になったということでした。

簡単には自分の意見を変えようとしなかったB夫、その背景には、好きなカマキリに対する強い思いだけではなく、実存するものと架空のものということまで

深く考えていたというB夫、そのB夫を一生懸命説得しようとしたC夫、そして自分が最初から決めていた意見にB夫が考え直してくれたことに対してみんなの前で感謝の気持ちを伝えたE夫、子どもたちの真っ直ぐな姿から本当に多くのことを学びました。

このようなことをていねいに積み重ねていく中で、「みんなの中の私」「私は私たちの一人」という感覚の根っこを身体の中に宿していくのだと考えます。

これから先の生活の中でも、たくさんの人たちと出会い、かわわって、「私は私」「私は私たち」という両方の感覚を、大きく育てていってくださることを願ってやみません。
(お茶の水女子大学附属幼稚園)

参考文献

- 鯨岡峻／著『ひとがひとをわかるということ 間主観性と相互主体性』ミネルヴァ書房、二〇〇六年
鯨岡峻・鯨岡和子／著『保育を支える発達心理学 関係発達保育論入門』ミネルヴァ書房、二〇〇一年